

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 谷垣 聡一郎

① 学習成果

私は本プログラムにおいて、「高度経済成長期のインフラ政策に見る日本人の環境観」というテーマで発表を行いました。

日本におけるインフラ整備は、特に高度経済成長期において急速に推進されましたが、その背景として1964年の東京オリンピック開催がありました。昭和31年(1956年)の経済白書に「もはや戦後ではない」という文言が記載されたように、当時の日本社会は戦後復興から立ち直ったばかりでしたが、経済の立て直しが何より最優先されたため、インフラ政策は立ち遅れていました。そんな中、1964年オリンピック大会の開催地が東京に決定されるや否や、大会の選手団や関係者、諸外国の有名人、国内外の観覧客等の移動を確保するため、首都高速道路や東海道新幹線といったインフラが急速に整備されたという歴史的な背景があります。

他方で、当時の急速なインフラ整備には、騒音や振動といった生活公害や都市景観の阻害といった負の要因に目を向けていない部分が大きく、2020年オリンピック大会の開催地が再び東京に決まった今日、1964年当時の環境観を振り返りつつ、来る2020年大会に向けてどのような環境観のもと大会の準備並びにそれに伴うインフラ政策を行うべきか模索する機会の重要性について学ぶことができ、非常に有意義な学習機会となりました。

② 海外での経験

私はハイデルベルクには過去に何度か訪れる機会があったので、ハイデルベルクの目新しさに驚くというよりは、むしろ第二の故郷に帰ってきたかのような安心感がありました。他方で、ストラスブールは初めての訪問だったので、ストラスブールという街の特殊性を実感しました。

最も印象的だったのは、ストラスブールが特殊な場所に立地している点についてでした。ストラスブールはアルザス地方の主要都市であり、ドイツとフランスの国境付近に立地しています。フランスの首都パリまでは電車で3時間である一方、ドイツの都市までは電車でたった30分という距離感、島国日本に住む私達には目新しいものだと感じました。ストラスブールにNeustadt(ドイツ語で新たな街の意味)というエリアがあるように、フランスの都市でありながら街にどこかドイツらしさを漂わせている点も、アルザス地方ならではのと感じました。

③ プログラム内容

私は、活動1日目のストラスブール市内視察について述べさせていただこうと思います。

最初に、Cave historique des hospices civils de Strasbourg(ワイン博物館)に行きました。こちらの施設は1395年に作られたそうで、地下の洞窟に沢山のワイン樽を保管してありました。中には1472年産のワインの展示までされていて、非常に貴重なものを拝見させていただきました。また、博物館としての展示だけでなく、入り口でアルザス産の多種多様なワインを格安で購入できるようになっているのも粋な計らいでした。

次に、Museum Historique de la ville de Strasbourg(ストラスブール市歴史博物館)に行きました。ストラスブールは世界史上、ドイツとフランスの係争地だったこともあり、街の帰属がフランスになったりドイツになったり右往左往したという歴史的背景があります。そのためか中世の騎士の鎧や甲冑といった展示品も多く、甲冑を実際に装着できるブースでは、アルザス地方の歴史の重さを彷彿とさせる甲冑の重さをも体験する事ができました。

最後に、自由時間に私はストラスブールの公共交通機関について視察しました。日本における地方都市では車社会化が問題となっており、車中心のまちづくりが進められてきた経緯があります。ストラスブールもかつては車社会化と乗用車による交通渋滞等に苛まれていたものの、車中心のまちづくりから人と環境に優しいまちづくりへの転換を模索した結果、公共交通機関の整備に成功した街だそうです。日本における地方創生に役立てられる部分がないかと思い視察していましたが、街の中心部に車がほとんど乗り入れされておらず、歩行者や交通弱者(子どもや高齢者、足に不自由のある人等)にとって優しい街だと実感しました。例えば、LRTというトラムとバスが街の至る所を走っており、運行本数も日本の地方都市に比べて多いと感じました。また、階段を上らずともそのままトラムに乗車できる場所も多く、階段が負担となりやすい高齢者にも細かな配慮がされていて、子供から高齢者まですべての世代の人々が快適に街を過ごせる、素晴らしい街だと改めて思いました。

④ 進路への影響

私は渡航前、学部卒業後に霞が関の国家公務員として地方の為に奔走したいと考えておりましたが、地方創生を考えるうえで、ストラスブールとハイデルベルクという二つの海外の地方都市を視察できたのは非常に有意義な経験となりました。また、ドイツ・フランスの大学院生と交流する中で、海外の大学院で世界中の留学生たちと議論し、日本という国について堂々と説明できるようになりたいという想いも新たに生じつつあります。特に、国境を越えた人の流れに限らず、「人の流れ」という現象に焦点を当てて考察する事で、日本における都会から地方への人の流れを作り出すにはどうすればいいかについて考える手掛かりになるのではないかという問題意識から、transcultural studies という学問それ自体にも強い興味関心を抱くようになりました。

本プログラムを通してお世話になった国際交流推進室の職員の方々やカム先生夫妻、引率の橋本さんと横田さん、ストラスブール大学とハイデルベルク大学で交流した学生の皆さん、共に研修を過ごしたプログラムの仲間たち、並びに今回のプログラムを通して関わった皆様には心より感謝の気持ちを述べさせていただければと思います。本当にお世話になりました。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 2回 安藤百香

海外渡航が人生初だった私にとって、このヨーロッパでの研修で見たものや感じたことはすべてが新鮮だった。ヨーロッパに立ち並ぶ、絵画の一部を切り取ったような美しい西洋建築物から漂う、京都の和風建築とは全く違う「異国の伝統」に圧倒された。そして現地を歩き交う人々には、世界の最先端を歩いてきたというある種の余裕と誇りが感じられた。歴史も伝統も人々の生活も、何もかも日本とは違う環境が広がる現地では戸惑いを覚えることもあった。しかし、ハイデルベルクの街を歩いていた1人の女性に拙い英語で道を尋ねたとき、見知らぬ私に向けてくれたその笑顔は、国の壁など感じさせない温かさをもって今も脳裏に焼き付いている。

ストラスブール大学とハイデルベルク大学でのワークショップを無事に終えて迎えた研修最終日、私たちはハイデルベルク城を見学した。赤いレンガが一つ一つ積み上げられた城壁の横に立ち、空高く聳える城の頂上を見上げた時、この壮大な建造物を生み出した歴史的権威が存在したことがひしひしと感じられた。城を見学する中で、私は未だ傷つくことなく残っている部分より戦争によって倒壊した部分に目を引かれた。かつての時代を生きた人が、その魂を注いで建てた建物につけられた「傷跡」を見ることは、その時代や当時を生きた人々が受けた傷を、唯一目で見えて感じる術であると私は考える。このハイデルベルク城は、三十年戦争、プファルツ継承戦争などによる倒壊を経験してきた。戦争を経験していない私たちは、その残酷さや激しさは人伝いの情報によって想像することしかできない。しかし、このように当時のまま残された歴史的建造物は、この先歴史をより一次的情報に近いものとして残していく価値あるものだと感じた。ハイデルベルク城の倒壊部分を見たとき、私は「原爆ドーム」が脳裏に浮かんだ。原爆によって崩れ傾いた日本の世界遺産も、戦争を経験してきた人々と歴史の傷を象徴している点で、現代を生きる人々へ訴えかけるものは、このヨーロッパに誇る壮大な城と本質は何ら変わらないのかもしれない。

ハイデルベルク城の庭を歩いた後、城の中にある薬事博物館を見学した。棚に多くの薬草瓶が展示されているのを目にし、西洋でも現代のような万能な化学薬品が開発されていないころ、医療においては効用に合わせて数えきれないほど多くの薬草が薬として用いられていたと分かった。一部で展示されている入れ物の中を開けると、中身に薬草がしっかり入っており、どれも微妙に異なる独特な香りがした。また薬草だけでなく、窓の外に女性の姿の影が映る薬室が再現されていたり、キリストが薬剤師として描かれている絵が展示されていたりと、西洋美術の要素が取り入れられていたのも非常に興味深かった。

私はこの研修において、広い世界に出て異なる価値観を持った人々と交流する中で、自分の人生の選択肢の広さに希望を感じることができた。自分が抱いていた日々の小さな悩みも、視野を大きく持つことで広く受け入れる余裕ができた。国内にとどまらず、勇気をもって外の世界に足を踏み入れることで自分をもう一段階成長させることができると学ぶことができたこの研修は、私が今後の進路の選択をするうえで、海外も選択肢として考えるきっかけを作ってくれた。そして、今回のテーマである「エコロジー・スタディーズ」は、生態学や環境学の側面を考えると理系学問からのアプローチも多いが、人文社会学を学ぶ私たちは、今回のように様々な文系学問と結び付けながら問題を議論することで、1つ1つの問題にどう向き合っていくことが正しいのかを、より人々の生活文化に即した視点で見極めることができると感じた。

このプログラムを行うにあたり色々とお動いくださいました方々、現地で協力してくださいました方々、このプログラムとともに参加した仲間にごこの上なく感謝しています。素晴らしい経験を、ありがとうございました。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部2回生 菅澤由佳子

ストラスブール・ハイデルベルグ派遣の3日目の活動は、Palais Rohan ミュージアムとノートルダム大聖堂を中心としたストラスブール市内の見学だった。

ストラスブールのノートルダム大聖堂は、12世紀から15世紀にかけて建設されたためいろいろな様式が混ざり合った不思議な見た目の建築物だ。博物館ではそれぞれの時代ごとの彫刻の一部やレプリカが展示してあって、実際に触れそうな距離まで近づいてみる事ができた。Palais Rohan ミュージアムのルネサンス絵画は、まさに世界史でならったこの時代の絵の変化がみられてとても興味深かった。プログラムに参加したメンバーの一人が美学を専攻していて、私が展示物を見て思った疑問に答えてくれたり、面白い展示物について感動を共有しあったりしてくれた。普段の大学生活ではあまり交流のなかった、異なる専修に所属する学生と友人になれたことも、プログラムによる貴重な体験の一つだったと思う。

ノートルダム大聖堂ではその日ミサが行われていて、ミサの直後に中に入り荘厳なステンドグラスや有名な時計を見学した。直前に博物館で建築について学んでいたため、なおさら目に映るものが興味深く感じた。しかしノートルダム大聖堂について一番印象に残っているのは、立派な建物やステンドグラスではなく鐘の音だった。ホテルが旧市街にあったため、ストラスブール滞在中は、毎朝、活動に向かうときに鐘の音が響いているのが聞こえ、私にとっては観光地である大聖堂は街にとっては日常の一部なのだろうと考えると、その土地の人々の生活や歴史の一端を知ることができた気がした。

ストラスブールは、二つの国のはざまにあり歴史上何度も領土戦争の最前線となった町で、同時に文化の交流地点として栄えた場所でもある。そのため歴史的に重大な出来事が数多く起こり、WWII後にはヨーロッパの連帯を進める欧州評議会が置かれた。私は現代史を専攻しているのだが、それまでヨーロッパの複雑な歴史に関心は持ちつつも、それらをただの知識としてしかとらえていなかった。しかし、中世から現代にかけて、様々な歴史的な出来事が起きた場所を実際に訪れ歩いたことで、歴史をより身近なものとして感じるようになった。中世の建築物と、そこで今でも行われる宗教儀式を見たことや、領土戦争の跡地と戦後社会を構築してきた欧州評議会が同じ場所にあると知ったことで、バラバラだった歴史の知識が、昔から今まで同じストラスブールで起きた出来事として繋がりをもち、そこにいる自分にとってもリアルで身近なもののように感じたのだ。

今まで現代史に漠然と興味はあったが、なぜその分野を選んだのかについて自分で心から納得できる説明ができなかった。しかし、この研修で過去と現代の繋がりの実感したことによって、私は自分が体験できなかった過去が、現代とどのように繋がっているのか知りたいと思っているのだと、学ぶ目的をはっきり説明できるようになった。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 分林寛奈子

2019年2月3日(日)の活動についての報告

ストラスブールに到着し3日目の朝を迎えた我々は、街の中心にそびえ立つ世界遺産ストラスブール大聖堂の内部を見学すべく、大聖堂広場へと赴いた。しかしながら、日曜日の朝ということもあり、大聖堂の中ではミサが執り行われていたため見学は午後になるまで不可とのことだった。我々は気を取り直し、そのすぐ隣に所在するロアン宮(Palais Rohan)へと向かった。この建物は、18世紀にストラスブールの司教であったロアン大司教(Prince cardinal de Rohan)の宮殿であり、ルイ14世付きの建築家として知られるロベール・ド・コット(Robert de Cotte)により建てられた美しい古典主義様式の建築である。現在は、装飾博物館・考古学博物館・絵画美術館の3つの博物館より成る博物館として一般に開放されており、その横には、大聖堂にゆかりのある彫刻などの展示があるルーブル・ノートルダム美術館(Musee de l'Oeuvre Notre-Dame)が併設されている。この日はちょうど2月の第一日曜であった(フランスでは法律により第一日曜に博物館が無料開放される)ため、我々は無料で全ての博物館を行き来することができた。私は文学部で美術史を勉強しているため、まずロアン宮の中の絵画美術館に足を踏み入れた。ここは宗教画の宝庫であり、ボッティチェリの『聖母子像』やティツィアーノの『ダナエ』など、名だたる巨匠たちの作品を間近で鑑賞することができ、未熟ながらも西洋美術を勉強する者にとっては至福のひとつときであった。その後、ルーブル・ノートルダム美術館に向かったが、なんとここには中世美術の代表的彫刻とも言える『シナゴグ』が展示されていた。この彫刻と出会えたことは、今回の派遣の中で私にとって一番の喜びと言っても差し支えないだろう。教会と共に歴史を刻んできたストラスブールという街で、数々の西洋美術作品と触れ合えたことはかけがえのない経験であった。その後、ミサを終えた大聖堂の内部を見学することができ、美しいステンドグラスや天文時計など、中世ゴシック様式の素晴らしい建築や内装を味わった。

京都よりも格段に厳しいフランスの寒さに耐えつつ、次に我々は、イル川の本流が4つに分かれる地区「プティット・フランス(Petit France)」に向かった。白い壁に黒の木組みといったアルザスの伝統的な建築が立ち並ぶこの地区は、かつてドイツの占領下にあったこともあり、フランス領でありながらもドイツの文化が色濃く残る場所であった。

夕食は、ストラスブール大学の学生たちと、フランスの伝統的夕食を楽しんだ。日本でもなかなか食べる機会のないエスカルゴや、予想をはるかに超えた量で出てくるシュークルート(ドイツ語でザワークラフト)など、普段とは異なる食事に我々は大いに盛り上がった。ストラスブール大学の学生は、日本語学科で研究しているということもあり、彼らの堪能な日本語に、英語すらままならない私は恐縮するばかりであった。また、この食事会にはストラスブール大学のシャール先生も同席してくださり、先生の明るいお人柄に、場は終始和やかな雰囲気包まれていた。こうして、フランス3日目の夜は終わりを迎え、ホテルに帰った我々は来たる翌日のプレゼン発表に向け最終の仕上げに取り掛かるのであった。

2月3日の活動に関する報告は以上である。最後のまとめとして、今回の研修全てを通して私が学んだことと言えば、それは「外に向かって一歩を踏み出す勇気」であろう。サポーターとして現地から合流してくださった京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻の1期生である劉郁希さんをはじめ、この研修で出会った数々の先輩方の全員が留学経験者であり、皆様には留学を通じて得た貴重な経験や、それに伴う苦労など、非常に興味深いお話をたくさん聞かせていただいた。そしてハイデルベルクでの京都大学欧州拠点訪問では、京都大学と海外大学の多様な連携や、京都大学による海外留学の支援など、我々が思っている以上に留学への窓が開かれていることを知った。長い間京都に暮らしていると、留学といっても自分とは少し距離のある遠い事柄だと考えてしまいがちだったが、一歩踏み出して自ら知ろうとすることで、留学はもっと身近なものになると実感した。私にとって、今回は二度目のヨーロッパ渡航であったが、観光客として訪れた一度目とは異なり、学問的な面でもかなり密度の濃い8日間を過ごせたように思う。特にハイデルベルク大学では、学生の国籍が様々であり、ヨーロッパだけではなく多様な価値観に触れることができた。中世以来のキリスト教文化が根付く場所としてだけでなく、国際交流の拠点としてのヨーロッパの魅力を再発見した今、次は留学生として2,3年後、再びヨーロッパの地へ戻ってきたいと考えている。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 2年 立石和奏

今回の海外渡航は私にとって2度目のヨーロッパで、どこことなく懐かしさを感じた一方で、新しいことに溢れた一週間でもあった。その中でも特に印象に残っている出来事は二つある。

一つ目は、いくつかの価値観の違いである。まず、色々なレストランを訪れたが、どのお店にもヴェジタリアンメニューがあった。日本ではヴェジタリアンメニューを見たことがなかったため驚いた。日本でも少しずつハラルのお店などが増え、多様な食性が受け入れられるようになったと思うが、まだまだ閉鎖的な部分があるのかもしれないと感じた。また、次に驚いたのが結婚に対する考え方である。ストラスブール大学のシャル先生は日本のフェミニズムについて研究されており、お話させて頂く中で結婚についての話がでた。カム先生が日本の結婚式場に「人生で最も大切な日」と書かれた幕がかかっている、と話すと、シャル先生は「本当に？信じられない！」と非常に嘆いていた。最初はその意味が分からなかったが、確かに、人生で一番大事な日は必ずしも結婚ではないはずなのに、それに違和感を覚えないほど知らず知らずのうちに固定観念を持っていた。そのような点においても海外に出たり、まったく異なる背景の人と交流したりすることは非常に大切だと思った。

二つ目に心に残っているのは、ストラスブール大学やハイデルベルク大学の学生とのワークショップである。ストラスブール大学でのワークショップでは日本語で発表を行った。私は、普段学校で発表するとき、文章が長くなりやすく、もっと要点を絞って簡潔に話せるようになることが課題であった。今回の発表の中で、日本語 native でない学生に理解してもらえるように文章の長さや例の挙げ方などを工夫したことで、その課題が少し改善されたように思う。また、質疑応答の中で、まったく思いつかなかった視点をもたらうことができ非常に良かった。ワークショップの後に、ストラスブール大学の学生と一緒に夕食をとったが、学校やアルバイトの話など様々な話をし、友達になることができたことがとても嬉しかった。ハイデルベルク大学のワークショップはストラスブール大学の時よりも発表者も多く、発表後のディスカッションの時間が長かった。ハイデルベルク大学の院生は一人30分も発表しており、その内容に自分との圧倒的な差を感じた。今回の私たちの発表も決して手を抜いたわけではなかったが、参考文献の収集や全体の流れが甘いところがあった。また、質問を予想して準備していなかったので、質疑の際にははっきりと回答することができなかった。まだまだ未熟であることを痛感させられ悔しかったので、私ももっと内容のある発表ができるように勉強していこうと思った。一方で、このような海外研修の経験を重ねる中で、英語でのプレゼンテーションやディスカッションに少しずつ慣れ、議論の流れを掴んだり、自分の意見を伝えたりと、できることが徐々に増えてきたように思う。学術面だけでなく日常会話においても徐々に恥ずかしがらずに英語で会話したり、初対面の人とも交流したりすることができるようになり、自分の人間関係や世界が広がっていくのを感じた。また、2つの大学でのワークショップや学生交流の中で共通して感じたことは、3か国語、4か国語話せる人が大勢いることだ。日本では、日本人とは日本語で、外国人とは英語で、という使い分けが多い印象だったので、同じ人とTPOに合わせて媒介言語を変えることに非常に驚いた。しかし、改めて考えてみると、言語はコミュニケーションのために存在しているのだから当たり前なことだと気づかされた。私は、英語は、そのような目的で勉強していたが、第二外国語であるドイツ語は、勉強すること自体が目的で、習得したときの学術面や就職面の利点を気にしていたが、しかし、そうではなく、ドイツ語でコミュニケーションをとりたい、という想いだけで勉強しても良いのだ、と知って気持ちが軽くなったと同時に、ドイツ語の勉強に対する意欲も高まった。

この研修を通して私が一番良かったと感じていることは、留学や研究に対する意欲が高まったことだ。海外で研究されている様々な先生方や学生と出会えたことで、非常に刺激を受け、憧れを抱いた。今までは、留学したいと思いつつも、語学やお金、単位など他のことで不安がぬぐえず、なかなか大きく行動することができなかったが、何よりも大事なものは、学びたい、という想いであることを知った。また、留学している学生や様々な国を渡ってきた先生方に共通して感じたのは、視野が広く、価値観が寛大であること、そして、みんな生き生きと研究していることである。海外にでるということは、もちろん大変なことも多いけれど、それだけ得るものも大きいのだと、彼らの姿から改めて気づかされた。私は、今年の春から地理学専修に所属し、特に自然地理学を学びたいと思っている。ドイツは自然地理の父と言われるフンボルトの生まれの地であり、ハイデルベルク大学だけでなく、他の大学にも歴史ある地理学の研究室があることを知った。これから、英語だけでなくドイツ語でも講義が受けられるように勉強を重ね、是非ドイツに留学したい。その際にさらに有意義な時間が過ごせるよう、語学だけでなく、専門分野の知識も可能な限り習得していきたいと思う。

最後になりましたが、引率して下さったカム先生、橋本さん、横田さん、現地でお世話になったストラスブール大学、ハイデルベルク大学の教職員、学生のみならず、準備等に協力して下さった国際交流推進室の方々、その他この研修に携わって下さったすべての方々へ厚く御礼申し上げます。このような経験をさせて頂いたことに本当に感謝しております。どうもありがとうございました。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 朱俊銘

①学習成果

「人文社会学はどのようにエコロジー・スタディーズに貢献できるか」というテーマを考えていくうちに、自分の勉強したい専門分野をより広い視点から見つめ直しました。日本文学と環境は一見全く異なる学問のようですが、実は古くから深く関わり合っていて、学際的な研究も少なからずされていることに気づきました。科学の知識だけで社会構築は成り立たない一方、人文学だけの力では問題解決に力不足なところも多々あります。となると、今日の研究は他の分野とのコラボレーションの重要性を実感しました。今回の派遣を通して違う国の人々がいかに学際的な学問や研究を進めているのかを垣間見ることができました。その上、これからの勉強や研究にもベクトルを変えて考えることができるようになった気がします。

②海外での経験

ヨーロッパは初めてで、着いて真っ先に実感したのはEUという連合体の強いつながりです。入管の手続きや両替なしでEUの国々を自由自在に行き来することができると思っていましたが、フランスにあるストラスブール市内の路面電車に表示されていた行き先はドイツの地名だったり、お世話になったストラスブール大学の先生はドイツに住んでいたりするなど「越境」を肌で感じました。それに加えて、ストラスブールという町は古くから要塞都市とされていて独仏がそれぞれ領有していた時期もありました。これは、欧州評議会がストラスブールに設立された理由の一つともなっているでしょう。国と国との間の戦争と平和、そしてその文化の融合も、当地で実際に見ながら考える機会を与えられました。

③プログラム内容

ハイデルベルク大学のワークショップについてお話ししたいと思います。ハイデルベルク大学の院生が大変興味深い発表ばかりをしてくださいましたが、個人的に最も印象的な2つ以外は割愛させていただきます。1つ目は、LGBTと環境問題を繋げる(Queer ecology)についての発表でした。発表者は、日本のLGBTの社会運動(とりわけ、同性結婚を巡るの)は環境運動を参考にして更なる権利の追求ができると主張しました。実際にネットワークや集団的需要、社会問題としての認識、経済・政治的な圧力といった角度から、日本の状況を分析してくださって、斬新かつ明瞭なる見解をお聞きしました。もう1つは、バジャウ族(Bajau)の保護とその問題についての発表でした。無国籍でインドネシア周辺にいる水上生活者であるバジャウ族は、政府などによって決められた海洋保護区(MPAs)などの環境政策に立ち向かって困難を面しています。責任免除などが規定されていますが、活動範囲や公的な場における発言力は限られている上、文化的に理解されていない部分もあります。外国の有志たちが手伝おうとしてもバジャウ族の立場から考えていない場合も少なからず、その独特性が保たれにくい状態となっています。バジャウ族については完全に知らなかったため、当然ながらおもしろく伺いましたが、その上、先進国の人として世界問題を解決するときには往々にして先入観によって良いことをしていると思ひ込むことが多いようで、多様性を尊重しながらほかの文化背景を理解・保護するのも不可欠だということを教えてもらいました。

④進路への影響

本来、日本文学の研究を続けていくとしたら、学界の状況や資料の質と量、一次性を考慮し、海外留学などは自分と無縁だろうと思っていましたが、今回、ハイデルベルク大学で歌論を専門としておられる先生にお会いできて、日本の学界には実証主義に偏りすぎる上、外国の文献をあまり重んじていないというところもあると伺いました。すると、やはり自分の認識してきた研究方法などは唯一でなく、今後たとえ海外で滞在せずとも海外の学界動向にも注目に値すべきだと、研究の態度などについて再考を促してもらいました。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程3年 (橋本 紘樹)

2019年2月1日から9日にかけて、ハイデルベルク・ストラスブール派遣プログラムが実施された。京都大学文学部とハイデルベルク大学文化越境 (Transcultural Studies) 学部の修士課程における、ジョイント・ディグリー制の設置を機縁としたものであり、ここ数年恒例になっている。私は一昨年に引き続き、引率という (分不相応な) 身分で、2度目の参加となった。訪れる土地は同じでも、不思議と景色は違って見える。訪問した施設やワークショップに関しては他の参加者の方々が個別に報告し、ストラスブールで得た経験の全体像を引率の横田さんが描いてくれることになっているので、ここではハイデルベルクでの印象を総括したいと思う。

ハイデルベルクでの滞在は、初日からトラブルに見舞われた。ホテルの給湯システムが壊れ、シャワーからは冷水しか出てこなかった。翌朝フロントに事情を聞きに行くと、既に修理済みだと言われ、なぜか逆に怒られてしまった。ともあれ、これでようやく温水を使用できると思った矢先、今度は市内の水道に問題が生じたようで、ハイデルベルク全域で水道水の使用が禁止となった。フロントの対応も、水道水の件も、どちらもこれまで日本で経験のないことだったので (ドイツでもかなり珍しい状況なのだろうけど)、改めて異文化というものを肌で感じた思いだった。一方で、ハイデルベルクの人たちの優しさに触れることもできた。ハイデルベルク城を訪れた際には、併設のレストランの方が、危険性のある水道水を使用してはならないことを、私たちにも理解できるドイツ語でとても丁寧に何度も説明してくれた。外国人である私たちにその情報が行き届いていないと思ったからだろう。

さて、プログラムのメインともいえるハイデルベルク大学の学生とのワークショップは、知的刺激に溢れていた。特に、中国における人口増加と環境問題との関係についてのプレゼンテーションが私の印象に強く残っている。都市部へ人々が流れ込むことで、農村部は荒廃し、都市の環境は悪化するという事態を緻密に分析し、人間の活動と自然がいかに密接に関係しているかを明瞭に理解させてくれるものだった。「人」と「自然」に根拠のない境界線を引き、いつのまにかそれを当然のこととみなしていたことに気づかされ、目の覚める思いだった。カム先生がワークショップの最後を、「自然とは何か?」という問いを全体に投げかけることで締めくくろうとしたのも、そうした認識を私たちが持てるよう促す、という意図があったからだろう。思えば、「人文社会学はいかにエコロジー・スタディーズに貢献できるか」というのが、今回の派遣プログラムのテーマだった。私たちが現在当然だとみなしている枠組みや考え方を省察し、「自然」に関連する問題を「人」を含む様々な要素の複雑な絡まり合いのなかで捉えることのできる視座を持つこと。その重要性に気づけたのが、私にとって何よりの収穫であった。さらにいえば、当然を疑うことは、学問の領域を超えてとても大切な思考だとも思っている。先に述べたホテルのフロントでの出来事一つをとってみても、なぜ相手が怒ったような態度をとっているのか、自分の考えや思い込みを括弧にくくり、きちんと考えれば理解できたのかもしれない。大げさかもしれないが、そこには他者理解の可能性が広がっているのではないだろうか。自分には理解できないと思った時にこそ、理解しようとする姿勢が必要になってくる。派遣プログラムを通じて得たのは、まさにそうした認識に他ならない。

平田先生、カム先生、国際交流推進室のみなさま、シャール先生をはじめストラスブール大学の人たち、ハイデルベルク大学関係者、および現地で私たちと交流してくれた方々。このような素晴らしい派遣プログラムを作り上げてくださった全ての人に、心からの感謝を最後に申し添えておきたい

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士課程3年 横田 悠矢

今回の派遣プログラムでは、ストラスブール大学日本語学科およびハイデルベルク大学トランスカルチュラル・スタディーズ・センターで両大学の修士課程を中心とする院生とワークショップを行うとともに、京都大学欧州拠点を訪れ、研究・教育活動の支援や大学の国際化推進について学ぶ機会を得た。ハイデルベルクに関しては他の報告書に譲り、以下ではストラスブールでの研修について報告する。

「人文社会学はどのようにエコロジー・スタディーズに貢献できるか」をテーマとするワークショップは、中国の国内移住政策、日本における環境観と問題意識の文化表象、ドイツとベトナムでの環境に対する取り組みの相違、文学に見る環境あるいはネイチャーライティングの意義、洋上風力発電の普及拡大、エコロジーとヴィーガニズムなど多様な主題を扱うものだった。またディスカッションもさかんに行われ、繰り返し提示された論点のなかでも、文学研究・環境社会学・哲学など多分野に関わるエコロジー・スタディーズの前提には、人間対自然（動物）、都会対地方といった二元論自体を再考する余地とその必要性が認められるという主張が興味深かった。

欧州評議会では会議場見学のほか、第二次世界大戦直後の1949年に人権、民主主義、法の支配を促進するために国際機関が必要となった経緯、および主要組織（閣僚委員会、議員会議、欧州人権裁判所など）とその機能について説明を受けた。また質疑応答では、死刑制度の廃止、マイノリティーの保護、サイバー犯罪や人身取引への対策といった加盟国の協定や、日本を含めたオブザーバー国のステータス、ロシア・トルコ両国が拠出減額に至った背景の相違と前者に対する制裁といった近年の懸案事項など、多岐にわたる関連知識を得た。

さらに、アルザス地方博物館、ストラスブール市歴史博物館、ロアン宮内の考古学博物館・装飾博物館・美術館、中世・ルネサンス期の彫刻やストラスブール大聖堂の建築過程を展示・紹介したルーブル・ノートルダム美術館、近現代美術館など市内にある数多くの博物館・美術館を見学し、アルザス地方やストラスブールの歴史・社会・宗教・文化・習俗に関する理解をいっそう深めることができたのも、貴重な成果である。

一週間の研修を通して留学を前向きに検討するようになった、という参加者の声が多かったのは印象的である。今後も京都大学・大学院から多くの学生や院生が、交換留学制度や「京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻」を通じて、盛んな大学間交流に貢献してゆくことが強く期待される。

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科一年 劉郁希

今回のハイデルベルグ・ストラスブール大学研修ワークショップは「エコロジーと人文社会科学」をテーマにし、京都大学・ストラスブール大学・ハイデルベルグ大学の先生と学生の間にも熱烈な交流が行われていた。

エコロジーという概念は狭義的に自然環境問題と思い込んでいたが、ここで人文社会科学と結びつき、広義的な意味で捉え直すことができる。この視点から、私自身を含め、京都大学の学生たちは幅広い問題点を基つき、自分の研究と思考を発表した。国民意識、文学など人文社会科学のテーマもエコロジーと緊密に繋がっていると、初めてわかった。発表した後に、ストラスブール大学とハイデルベルグ大学の様々な国の方とのディスカッションで異なる文化背景を実感した。自分が見慣れた社会だけを注目すれば、固まった考え方は制限がある。それを破るために、留学したり、外国の人と社会のことを学んだりすることが必要になる。このワークショップをきっかけにして、真剣に考えたことがない問題を考え始めた。それは「自然」とはなにか、「自然と人間」とはなにか。今まで人間中心となる社会論を考え直すことも必要ではないかと思う。

また、研究とはなにか。これも私が今回で考えた質問の一つである。巨視的な歴史問題や、非常に複雑な社会問題はともかく、そのほかにも課題になれる研究問題がたくさんある。例をいうと、今回ハイデルベルグ大学でのワークショップでは、日本の知覧特攻平和会館についての発表がある。その発表は、記念館の基本情報を紹介した上で、歴史研究者として感じた違和感と自分の考えを発表した。どうしてこの記念館の内容は客観性が足りないか、どうして展示の仕方が完備ではないと感じられるのかなどの問題点を、発表者が詳しく説明した。その後、自分の研究ルートとして、館長とのインタビュー、自分の調査結果と改善方法も言及した。これは小さな自主研究である同時に、非常に有意義的な研究と私は思う。研究というのは、ただの学術的な分析だけではなく、社会の中に問題点を発見し、問題の原因を判明し、自分の考えを論理的に論じることだと理解した。どんなささやかな問題にも、研究する意義があるのではないだろうか強く感じた。

そのほかには、研修団の先生と学生と一緒にストラスブールとハイデルベルグ、この2つ大学都市に見学に行った。ストラスブール市歴史博物館と美術館などに見学することで、ストラスブールというフランスとドイツの間強くつながる地域の歴史、宗教、文化などの知識を身に着けた。また、欧州人権裁判所への訪問で、研修団の学部の学生は積極的にヨーロッパ及び世界中の人権問題について館内のスタッフに質問を出した。それを見た私は涙が出るほど感動した。今の若者の間に、人権問題に対して関心を持つ人が一人多くいても、社会はどんどんよくなっていく希望が見えるのだ。研修団の学生は主に学部二回生と三回生だが、彼らはすでに自分なりの考えを持ち、社会へ還元することに力を尽くすことを頑張っている。私はこのような学生たちを知り、今回の研修の大きな収穫の一つだと思う。

私は中国人学生として、日本へ留学し、更にドイツのハイデルベルグ大学に留学するたびに、自分のアイデンティティ問題にずっと悩んでいる。多く見れば見るほど、どのように自分を理解することがわからなくなった。自分の国籍、教育の背景、自分が理解する社会と社会問題などに対して、共感と違和感が同時に存在している。その答えを見つけるために、たくさんの人と出会い、たくさんの本を読み、たくさんのところに見学に行く。自分と他者の異同をはっきり分別したいためである。研究の目的と人生の目的に当惑している私は今回の研修プログラムに少しだけ進む方向が見えるような気がした。たくさん人の話を聞いた上で自分の道を見つける。他人と同じような悩みがあると、一人で戦っているのではないとわかった。人と人の心が結びつけることも感じた。

すべては「人間」ということである。社会問題と言っても、自然と言っても、文化（文化越境）と言っても、全てが人間同士の交流と流れの問題となる。今文化越境の専攻で勉強している私も人間の動きを研究していると言っても良いだろう。今までとこれからの留学生生活を、学術研究だけではなく、人生のためにも精一杯活かしたいと思う。最後に今回のプログラムを支えて下さった各大学の先生方、職員と学生すべての方々に深い感謝の気持ちを伝えたいと思う。